

「変わるアメリカ、変わらぬアメリカ」寺地 功次

このあたりにはいつも混み合う豆腐チゲの店がある。他に何件もコリアン・レストランがあり、参鶏湯、チヂミ、鍋・スープ料理など選り取り見取りである。中華料理も人気がある。飲茶の店は週末になると行列がで、四川の店では舌がしびれるほど辛く酸味の強い本場の汁無し坦々麺や麻婆豆腐が食べられる。水餃子専門店も少し高級な海鮮中華の店もある。庶民的な台湾料理の店もおもしろい。タイ料理のレストランはいつもにぎわっている。本格的なインド料理や中東料理が味わえるレストランも多い。少し濃厚な味に飽きたてきたら、ベトナム麺フォーの店に行くのもよい。

ここは新大久保でも赤坂でもない。ワシントンDC郊外のある町である。DC近辺にはこのような町がいくつかある。コリアン・レストランに寿司カウンターがあったりするのは日本とはちょっと違う。アジア系のお客が多く、本格的な味が楽しめる店ほど「西洋人」は見かけなくなる。もちろん日本食も人気がある。但し多くの日本料理店はコリアンやチャイニーズの人たちが経営している。これは日本でも各国料理店のほとんどが日本人、つまり現地人の経営だということを思い起こせば不思議でもない。それだけ普及しているということ。「スウシー」はフードコートのスタンドやスーパーのお惣菜売り場でも握っている。

アメリカにおけるアジア系人口の急増は一九六五年の移民法改正後から始まった。2000年国勢調査によれば、アジア系は全人口の3.6パーセントを占める。アジア系と言うと西海岸というイメージが強い。間違いではないが、実際には東部の大都市近郊にも多くが移り住んでいる。DCの西隣に接する全米でもかなり裕福な郡、ヴァージニア州フェアファックス郡とメリーランド州モンゴメリー郡では、アジア系がそれぞれ人口の13パーセント、11.3パーセントを占める。これはカリフォルニア州並みである。実はDC自体、伝統的にエスニック集団、とりわけアフリカ系アメリカ人(黒人)が多く住む都市でもある。彼らはDC人口の60パーセントを占め、東隣のメリーランド州プリンスジョージズ郡では62.7パーセントがアフリカ系である。第二次世界大戦後に最も人口が増加した集団はヒスパニック(あるいはラティーノ)系で、2000年で全米人口の12.5パーセントを占めている。彼らもDC郊外に多く住んでおりフェアファックス郡では11パーセントを占めている。全米平均を上回るほどではないが、それでもDC及び近郊でのこの集団の存在感はアジア系以上である。

在外研究のため久々にアメリカに居住し、史上2番目の大きな移民の波を経験するアメリカを、衣食住のみならず政治経済、社会や教育現場の変化という様々な面からつぶさに観察することができたことは貴重な体験であった。同時に、戦後何度も繰り返されてきたことではあるが、世界の他の地域への軍事介入をめぐってアメリカの「価値」やアメリカの「不幸」中心にしか語らぬ指導者やマスコミの姿を日々テレビ・新聞等で見たり読んだりすることは、苦痛でもあった。いつの時代もそうであったようにアメリカが変貌しつつあるのは間違いない。ただ、どのように変わりどのように変わらぬのか。それが問題である。